

んでもらえるかどうか勝負どころ。動かないので最初は生きた犬とは見えなかつたらしい、と思つてもらえれば成功である。

裁判官の登壇まつて外される手錠、腰縄 金属のおと
山中 蓄

一般の傍聴者わずか十一枚しかない裁判を傍聴した折の作、ということである。どんな事件の裁判か、容疑者はだれか等には触れていないので、読者には分からない。ドキュメント・タッチで、じつさいを知ることの少ない法廷の緊張した空気をうたつていて注目した。俳句の方ではふつうに試みる「吟行」を、短歌ではあまりやらない。短歌でも「取材」について、もつと積極的に考へるべきかもしれない。

猛烈に風が欲しくてあんなものまで羨める携帯のファン
十亀弘史

今年はやつたという携帯用扇風機なるものを、みみちちいと軽蔑しているらしい作者に同感である。あんなものは絶対にほしくない。ただこは、耐えられない暑さを表現して、説得力ある作と読む。

にんじんの苦手なうさぎと暮らすうち吾が肩こりの
谷ちえみ

谷さんの家では、部屋にウサギを飼っているらしい。「心の花」の校正を担当してくれているので、毎月わが家に来られるのだが、彼女のからだにはウサギのにおいが染みついているらしく、テオがいつも大いに気にしている。今月の五首はすべてウサギにかかわる作。この作

のとぼけた味わいに心ひかれた。

フランスとは反対に回す鍵穴のいまだ間違ふわが左手は
松本実穂

長くフランスで生活してきた作者。体がおぼえなじんでいることの奥深さをうたつて鋭い。心や意識よりも体の方が、フランス生活をふかく記憶しているのだろう。

めじるしの木々をなくした鳥たちが不意にゆらいで
蒼穹をよこぎる
石田郁男

連作になつていて、つい最近、木々が伐採された跡を見るツアーに参加した折の作ということが分かる。鳥には空の道が見えるらしい。一首、目印が消えて困っている鳥たちがユーモラスである。

テーブルは消毒されんこの指がつけたであろう菌殺
めんと
加古 陽

新型コロナウイルス関係歌があいかわらず多い中の一首。一人でファミレスに行った一連の最後におかれた一首である。誰もが思い当たりそうな場面的確にとらえた取材力。

唯一度目に留めくれし「嫌ひだが今月の歌は筋が通
つてゐる」
峰尾 碧

石川不二子さん追悼の作。私はつい数日前、石川さん追悼の文章を書いた。「愛想を言わない。ストレートに欠点を指摘する。「こんな歌だめです」と一言で切り捨てることもよくありました。初心者には厳しいですが、石川さんらしい率直さと生真面目さがにじみ出ているせいもあって、人気がありました。」と書いた。